

全滅に近い家は、二丁目古根村新太郎夫婦及子女二人、五丁目石井文吉夫婦及子一人、二丁目石川重三夫婦及子息の妻、子一人、三丁目柳井宇三郎夫婦及子女二人、四丁目中山兼次郎夫婦及子女三人等である。焼失した主なる建物は、横濱高等女學校、太神宮増徳院等である。増徳院は古く大同年間の創立に係る眞言宗の名刹で、洋館ばかり立つてゐる間に聳立してゐたので、外人からも珍らしがられてゐた。當時此の焼野原に踏止まつた町の有志は、元町再興會を増徳院跡に設けて、町民を集め、物質配給の事、バラック建設の事、相互扶助の事、進んでは町の復興の事など、何異となく協議を遂げ、爾來一同銳意以て之が遂行に努めた結果、一年有半後には六百十五戸の復興を見、町並みも稍、整ひ、商況も漸次に復活した。

第五章 本市第五方面

青木町―神奈川町―高島町九・十丁目―表高島町―林町―山内町―新浦島町―千若町―橋本町―子安町

第一節 一般 狀況

青木町・神奈川町・子安町は、本市の第五方面で、市の東北部の広い地域を占め、東は港内に面し、西と東北は丘陵を負うて、橋樹郡の諸村に隣接してゐる。地震は市内の中心地と較べれば激しいといふほどではなく、丘陵地などは極めて輕微であつた。而かし平地は多少倒潰家屋を出し、火災は免れなかつたので、被害は相當にあつた。その焼失戸數は、青木町は約千七百戸、神奈川町は約千四百戸、合計全焼約三千四百戸である。此の外、各地域を通じて、全焼約三千四百戸を算した。又各地域を通じて全潰約一千戸、半潰二千戸で、全潰半潰全焼を合すれば六千戸である。崖地は、神奈川町・神明町七百二十一番地々先の京濱電車の堤が、幅約五間崩壊して、その下の家屋七戸を埋め、數名が壓死した。橋梁は、漣橋・碧海橋・裏海橋・裏高島橋・海運橋、八千代橋等が、破壊し或は焼失墜落した。歿死者の數は、關内關外方面に較ぶれば、少く、約七十八である。當時罹災者は主

として最寄りの丘地へ避難し、幾分は海邊の町や高島驛構内へ遁れた。

神奈川方面はその一部を除き、火災が襲つて来るまでに、相當の餘裕があつたので、家財を出した者が多く、その爲めに生命を捨てた者が多かつた。幸ひ焼け残つた家が多かつたので、多くは手筈を求めて、暫くそこに寄寓した。頼る邊なき人々約一千人は、青木小學校、搜眞女學校其他に收容された。他の地域から避難して來た人は非常に多く、一時は數萬人であつた。

第一項 青木町 高島町^{九丁}表高島町 林町 山内町

青木町は、本方面の中、最も廣い地域を占めてゐる。南は淺間町と岡野町に接し、東は港内に臨み、地内の約七分通りは丘陵地で、その邊りは戸口が少ないが、港内に面する方には商業地も、住宅地もあつて、各種の工場もある。震災は埋立地である町に酷しかつた。

一字瀧下町並に寶町

兩字の戸数は約二百戸で、寶町は二十五戸、人口約九百を有してゐた。一帯に埋地で

はあるが、建物が新しいのと、小柄な家が多いので、倒潰は一戸もなく、唯二三の土藏が破れたに過ぎなかつた。幅三尺、長さ約五十間の地割を生じ、地盤は一帯に低下した。住民は主として寶町の空地に避難したが、海嘯の噂に驚いて、更に反町の裏山に轉じた。高島町方面よりの火が、午後四時頃に襲ひ來つて、町内悉く焼き拂はれ、橋梁も焼け落ちた。罹災の主なる建物は、寶町なる關東製鎖株式會社である。死者は出先にて二人あつた。

一字宮洲町並に大野町

一帯に埋立地で、宮洲町は約百二十戸、大野町は約三十戸、人口合せて約七百であつた。全戸數の約半は倒潰し、他は半潰であつた。川岸は至る所崩壊した。午後二時頃、七軒町二丁目からの火が延焼して來て、先づ町の左側を焼き、風位の變はると共に、更に右側を焼き、一戸も残らず焼失し、唯大野町の横濱船渠會社の一仕事場を残したのみであつた。罹災の大建物としては、久保田造船所、山田造船所、渡邊鐵工所、浦賀船渠會社出張所、横濱船渠會社分工場、同倉庫、新鐵工場等である。宮洲橋、連橋、海運橋何れも焼け落ちた。死者は六名である。

三字 七軒町

一六八

七軒町は神奈川驛の東北に方る字地で、鐵道線路が地内を横斷し、線路の東側は海邊に沿ふ埋立地であり、西北側は丘陵が迫つてゐる。戸數約二百、人口約九百五十。震災としては第二震に於て影響甚だしく、家屋の倒潰は全戸數の約七分通り、其の他も概ね半潰した。殊に三千六百十九番地は、近く明治三十年前後の埋立したところであるから、一戸も残らず倒潰し、石垣は殆ど悉く崩落した。地内の丘上に在る曹洞宗本覺寺は、神奈川開港の際暫く米國領事館となつてゐた著名な寺院であるが、其の本堂が倒潰した。當字地内は所々に地割を生じ、其の大なるものは幅三尺に及んで濁水を噴出し、川岸は殆ど全部崩壊した。震後間もなく高島町十丁目より發した火は、折柄の烈風に煽られて、見る／＼中に延焼し來り、地内を一舐めにして、元町方面に向つた。其の間僅に一時間足らず、斯くて地内は本覺寺下に約三十戸を殘存しただけであつた。安田銀行支店は倒潰を免れたけれども、火災は防ぐことを得なかつた。二丁目との間に架せる碧海橋は、中程が折れた上、燒失した。何分火脚急にして、住民は一物をも持出し得ず、本覺寺山や高島山に避難したのであつた。地内の死者十二人、中にも待合業金福方では

女將外二名、堀田藥店では主婦及母、小山勝也方では妻及子、中村貞之助方では夫婦、何れも壓焼死を遂げた。

七軒町二丁目は七軒町と宮洲町との間にある埋立で、戸數は百四十七戸、人口は約七百人であつた。この邊は花柳地で、藝者屋待合料理店等多くあつた。埋立地ではあるが、家屋は比較的小さく、唯三千六百十三番地の川岸が崩壊したため、その邊の四十戸が倒潰したゞけであつた。火は間もなく神奈川驛附近から發し、同町を焼き拂つた。火は午後零時半頃早くも同町を襲つたので、一戸も残さず燒失した。住民は碧海橋漣橋が燒けないうちに、逸早くこの橋を渡つて、淺野船渠會社の埋立地及權現山へ避難したので、死者は僅に二名であつた。尙他所へ出たる者で、二名の死者があつた。

四字 字上臺町 字臺町下 字臺町一部

上臺町は青木町の西南部にある丘陵地で、戸數百六十、人口四百五十六を有してゐた。全潰一戸、半潰八戸、他は小破程度で、たいした被害なくて済んだ。震害は極めて輕微であつたけれども、午後四時頃鶴屋町から延焼し來つた火の爲に、四百二十番地より四百五番地まで約十戸を燒拂ひ、自然に鎮火した。一方下臺町方面の火も迫つて來たが、之

は町民が必死となつて消防に努めたので、無事なるを得た。死者は他町に勤務中の者に数名あつた。戸外に遁がれ出でた人々は、百八十八番地附近の空地に避難した。他町よりの避難民が數百人入込んだ。

五 字下臺町及字臺町の一部

兩字は上臺町の下に連なる平地で、被害はたいしたことはなかつた。倒潰家屋は全部一割であつた。午後三時頃、火は鶴屋町方面から延焼して來たが、折柄巡邏中の神奈川署の石井巡查が大聲を擧げて、町の若者を呼び集め、自ら先に立つて、一同を指揮し、極力破壊消防に努めたので、辛くも火を消し止めることが出來た。一方西口でも、町民が出勤して、手押し唧筒を出し、之れを井戸に掛けたところが、過つて吸入管を水底に落してしまつたので、使ふことが出來なくなつて、一同困つてゐた時、町内の大綱神社の社掌吉田氏が身を躍らして、井戸の中へ飛び込み、吸入管を拾ひ上げて來たので、唧筒を使って火を消すことが出來た。焼失家屋九十戸で濟んだのは、全く石井巡查と、吉田社掌との働きに依るものである。死者は一人も出さなかつた。

六 鶴屋町

鶴屋町は上臺町の下なる平地で、戸數二百八十、人口二千二百五十を有してゐた。倒潰家屋六戸、他は半潰、若くは大破に近き程度であつた。新田間川の岸は、大半崩れた。午後二時頃スタンダート石油會社の火災で、火の流れは川中に注ぎ入り、筏材の數多を焼いて、大日本水道木管會社に延焼し、益、勢を得て、神奈川驛方面に向ひ、上臺町までを焼拂つた。一方輕井澤方面より焼け來つた火は、住民必死の努力に依り、關東製鐵會社の邊りで消し止めた。罹災の主なる建物は、倒潰で大日本樂器製造株式會社、倒潰後焼失で東亞肥料株式會社、單に焼失で大日本ベニヤ製材株式會社等である。他行中の者で死者五名、他町よりの避難者約二千名あつた。

七 字元町

元町は神奈川の中樞地域で、一部は丘状を成し、戸數百四十七、人口約七百五十を有してゐた。家屋の全潰したのは、唯一戸であつたけれども、半潰又は大破は尠からずあつた。初め神奈川驛附近から出火したと聞いて、一旦避難した人々は、直に立戻り、家財を

取纏めて、洲崎神社・普門寺・甚行寺・本覺寺の各境内又は鐵道線路へ避難したが、午後一時頃になつて、火は七軒町及宮之町の二方面から襲つて來て、高木山に在る二十一戸を殘したのみで悉く焼失し、人々は更に避難場所を換えて、持出だした家財の多くを焼くに委かせた。罹災の大建物は、神奈川郵便局で、倒潰はしなかつたが焼失して了つた。死者は只一人、別に他町に出でて一人あつた。

八 字幸ヶ谷竝に字栗田谷の一部

兩字は一帶の丘陵地で、幸ヶ谷は三百十戸、栗田谷の一部は、俗に岩崎山と稱へられ、戸數三十戸、人口合せて一千三百二十を有してゐた。家屋の倒潰三戸、半潰は全戸數の約三分の一、其の他は大破若くは小破であつた。飯田町との境なる土橋は半壊した。午後四時頃、洲崎神社方面よりの火で、七戸と土藏一棟を焼き、久保町よりの火で十九戸を焼き、更に横町よりの火で四戸を焼いたが、何れも附近の町民の必死の努力に依つて消し止め得た。淨瀧寺は本堂が傾き、表門側の長さ五十間の煉瓦塀が倒れ、岩崎邸の建築半の大建物と長さ四十間の煉瓦塀とが倒れた。勤め先にての死者二名、其の一人は巻檢事である。十月中旬頃より、憲兵隊分遣所を淨瀧寺に設けられた。

九 字宮之町

當字は平地で、戸數百五十六、人口約六百五十を有してゐた。倒潰家屋とはなく、殆んど被害がなかつたが、午後一時頃になつて、元町及對岸の七軒町よりの火が襲來した爲め、全町は烏有に歸した。避難場所は、大野町の埋立地、神奈川方面及岩崎山等であつた。出先での行衛不明者二人あつた。

一〇 字久保町竝に字幸ヶ谷の一部

久保町は平地、幸ヶ谷は丘陵地で、戸數七十二、人口約二百五十を有してゐた。家屋の倒潰なく、多くは大破若くは小破程度であつたが、午後二時半頃、宮之町を焼いた火先は、忽ちにして丘沿ひの片側を焼き、一方停車場方面よりの火先は、七軒町・宮洲町・瀧下町を順次に焼拂つて、更に對岸なる當地區に延焼し、内堀に沿うた片側を焼いて、一戸も剩さなかつた。罹災の大建物は、名古屋料理店・高見病院・武相銀行等である。勤め先にての死者は二人ある。

一 字 瀧ノ町

當字は平坦地で、戸數八十七戸、人口約四百五十人。家屋の倒潰は一戸もなく、多くは小破であつた。午後二時頃に至り、火災が宮之町より迫つて來た頃、神奈川消防署の唧筒が、柳町の火を消し止めての歸途、直に消防に掛り、地元住民も亦之に協力してゐたが、横町の宗興寺前より發した火が、遂に延焼して、全町を焼失した。死者は外出先で三人、避難場所は主として舊臺場であつた。

二 字 横町

當字は戸數七十四、人口二百八十あつた。家屋の倒潰はなかつたが、三百二十三番地の土藏より發火して、權現山の民家を除く六十三戸を焼き、更に瀧之町、獵師町、西之町方面に延焼した。主なる罹災建物は、宗興寺。避難先は反町の裏山。死者は他出中の者で一人あつた。

三 字 反町の中上反町

上反町は神奈川の鐵道以西、丘陵地に沿ひ、戸數約五百戸、人口約一千五百人を有してゐた。震災では倒潰家屋なく、半潰二十三戸、其の他大破程度を多少出だしたに過ぎなかつた。戸外に飛び出だした人々は、四百八十三番地なる千五百坪の空地と、遊廓裏の空地に避難した。火は本町と桐畑との間にある某錢湯屋から發火したが、附近の人々が駆け集まつて消し止めたことは大手柄であつた。若し消し得なかつたならば、此邊り人家密接せることゝて、必ずや大火となつたであらう。死者は關内方面への勤め人で數名あつた。他町よりの避難者が約二千名許も入込んだ。

四 字 反町の中下反町

下反町は神奈川の鐵道に沿ひ、上反町の東に續く地域で、戸數約三百五十戸、人口約一千三百人を有してゐた。倒れた家約六戸、他に多少半潰に近き程度の家を出だした。六百三十九番地に幅五寸、長さ十二間ぐらゐの地割を生じたが、尙其の邊りは一帯に地盤が二尺許低下したやうである。瀧ノ川の護岸各所に幾分崩壞箇所を生じた。戸外に出でた人々の中、約七分は東海道線路、三分は遊廓裏なる四百坪許の空地に避難した。直後五百五十五番地から發火したが、人々は協力して消し止め、大事に至らなかつた。

他に通勤してゐた者が五名遭難した。

一五 字反町の中遊廓反町

遊廓反町は上反町に續く地域で遊廓は其の一部を占め、災前の戸數約五百、人口約二千八百、其の内で妓樓二十一、藝妓屋一、娼妓約百八十、藝妓二名であつた。土地柄飲食店遊戯場なども多い。此の地域も神奈川一帯の例に違はず、震災の影響は大きいといふ程でもなく、一般民家が約四十戸程半潰して、其の他多少大破小破したぐらゐに止まつた。地割とてもなく、廓内を流るゝ小川の岸も何のことはなかつた。妓樓では第二金浦樓の裏三階家、伯島樓の裏二階家及第四森谷樓の裏二階家が何れも全潰し、料理店武藏屋も全潰した。死者は娼妓一人に止まり、外に重傷者ともなかつた。火災も幸に起らずに済んだ。されば斯かる際横濱に於ても東京に於ても、遊里といへば何處も、慘狀を極めたに拘らず、此地域のみはさしたることはなかつたのである。

一六 字反町の中桐畑

桐畑とは俗稱で、反町の一部である。一帯の丘陵地で、戸數約二百戸、人口約一千人、中

流以上の住民が多い。震害は輕微で、全潰一戸、大破約十戸、其の他多少小破もあつた。全潰したのは湯屋で、直に發火したけれども、警察官並に附近の人々が寄り集まつて消し止めた。死者は勤め先に於て數名あつた。他町から避難し來たもの約三千人あつた。

一七 字 廣 臺

廣臺は丘陵地と平地で、戸數二百三十六戸、人口一千八百八十人あつた。倒潰十七戸、半潰大破も多少あつた。瀧ノ川の岸が殆んど全部崩落した。主なる建物の被害としては、横濱腦病院は大破し、蓮法寺は附屬建物の一部が倒潰した。多くは腦病院附近の畑中に、他は自宅附近の宅地に避難した。死者は他出中の者に三人あつた。他よりの避難者は百六十人あつた。

一八 字 太 田 町

廣臺下の平地で、戸數二百十戸、人口約九百人を有した。家屋の倒潰四戸、半潰二十戸許、其他は概ね大破小破で、天理教會も小破であつた。火災なく、他行中の者が二名死し

た。他町よりの避難者約一千人もあつた。

一九 字三ツ澤(南北中)

三ツ澤は青木町の北部にある廣大な丘陵地域で、瀧ノ川の溪流が流れ、其の沿岸は低地をなしてゐる。戸數僅に八十戸、人口約四百名であつた。民家の倒潰はなく、半潰五戸、其の他多少大破したに過ぎなかつた。主なる建物の被害を記るせば、日蓮宗豊顯寺は市内で著名な寺院であるが、講堂、經藏、八幡堂、學生寄宿舎、檀林圖書館、庫裡及番神堂は倒潰し、本堂は半潰した。第二中學校、山王社、ラミ―製造株式會社は何れも大破した。此の地の名所なる横濱ガーデンの土手にも、崩壊した所があつた。尚豊顯寺附近には所々地盤に龜裂を生じた。死者は他出中の者に二名あつた。本地域は岡野町、平沼町など被害のひどかつた所に近かつたので、その方面から避難民は澤山來て、豊顯寺界隈に避難した。その數は約千五百人に達した。震災後憲兵分遣所を中三ツ澤に置かれ、又陸軍工兵隊は約二週間各戸に分宿してゐた。

二〇 字東西輕井澤

東輕井澤は一部平地で、其一部及西輕井澤全部は丘陵地で、戸數五百七十戸、人口二千二百八十人を有してゐた。家屋の倒潰約五十、半潰約二百五十、大破約二百七十であつた。百二十番地先から百四十三番地先までの間に地割を生じ、岸は殆んど全部崩壊し、新田間橋は大破して、通行不能となつた。死者は五名外に外出中の者で八名あつた。他町よりの避難者は約二千人あつた。

二一 松本の東部 字栗田谷の一部及字反町の一部

松本の東部、栗田谷の一部及反町の一部は、青木町の東北部を占め、松本及栗田谷は丘地が多い。總ての地域合せて戸數二百七十戸、人口一千二百十五人を有してゐた。被害は輕微の方で、倒潰四戸、半潰二十戸、其他多少大破があり、山崩れが栗田谷に多少あつた。地内二箇所から發火したが、附近の人々寄集まつて、幸に消し止め得た。町に死者はなかつたが、外出中の勤め人が十名許り行衛不明となつた。人々は反町小學校建築豫定地約四千坪の空地と、千三百三十五番地の約六百坪の空地に避難した。當日他より遁込んだ者は約三千人で、其の後も引續き寓居する者が多かつた。

一一三 字松本の西部及字栗田谷の一部

松本の西部及栗田谷の一部は丘陵地域で、戸數合せて百六十三戸、但し其の約四十戸は空家、人口は約六百五十人を有した。全半潰十六戸、其の他大破も尠からずあつた。千百九十三番地の高さ一丈の石垣が約十間崩れた。死者一名、外に外出中の者四名、他町からの避難者約一千五百名。流言甚だしく、爲に慘禍を見たことは遺憾であつた。

一一四 高島町九・十丁目

高島町九十丁目は埋立地で、普通民家は九十五戸、人口約四百五十人、別に九丁目に仲仕の合宿所が十二棟あつて、三百五十人ゐたが、其の多くは他で稼ぎ中であつた。此邊り震害烈しく、家屋の倒潰約七分通りに及び、其の他も半潰若くは大破した。火は間もなく十一丁目の停車場前から發して、北に向つて延焼し、折柄の烈風に勢を得て、擴がりに擴つたのである。此の火こそ實に神奈川方面の最初の火で、而も最も猛威を振つたものであつた。九丁目は風上であつたけれども、ライジングサンの石油火を受けて延焼し、斯くて九十丁目とも一戸も残らず焼失した。高島橋も焼け落ちた。住民は初

め鐵道線路及海邊の荷足船に避難したが、火の迫るに及んで、高臺に遁げ上ぼつた。死者は地元で十四人と他町にゐて死んだ者二人とであつた。九丁目の仲仕宮崎某方は妻及子女五人、外に合居はせた近隣の小兒一人、歿死を遂げ、主人は沖に稼いでゐたので生き残つた。

一一五 表高島町の一部及林町

此二町は埋立地で、周圍は水に圍まれ、水上には數多の筏材が繋いであつた。民家はなく、表高島町には三菱の棉花倉庫十八棟があり、林町には横濱工作所、谷鐵工所などがある。地震では何れも倒潰を免かされたけれども、ライジングサン・スタンプ・ト、兩石油會社に貯藏してあつた石油が爆裂し、帷子川を流れて海に入つたので、海上一面の猛火となつて、筏も小舟も悉く焼けた。加之、他の倉庫や工場もやがて襲はれ、悉く焼失した。高島橋は焼失し、八千代橋は墜落した。倉庫内の人夫二名、壓死した。

一一六 表高島町の一部並に山内町一・二丁目

當町々は一帯の埋立地で、三方は水に圍まれ、民家は無く、表高島町には貨物取扱の高

字松本

字栗田谷

高島町九・十丁目

表高島町

林町

山内町一・二丁目

一八一

島驛がある。被害はさしたることなく、驛舎も、機關庫も一寸破れたぐらゐで、上屋が所々倒潰したに過ぎなかつた。併し地盤は一帶に低下し、所々に地割を生じ、濁水を噴出した。地内三十箇所の建物は、ライジングサンの石油火で一時猛火に圍まれたけれども、風向の關係で、唯上屋の幾部と、數輛の貨車や、積入れの食糧品を焼いたのみで、他に延焼しなかつた。附近街々の避難民が幾千となく、構内に雪崩れ込み、中には海嘯を恐れ、他に立退いた者もあつたが、多くは貨車の中に一時落付いて、食糧品にも不自由を感じなかつたさうである。

第二項 神奈川町 新浦島町 千若町 橋本町 山内町

神奈川町は、本方面の中部を占めてゐる地域で、西南は青木町に接し、東は港内に向ひ、其他は子安町や郡部に隣り合つてゐる。中央から海岸までは平地で、商店工場等はあるが、丘陵地だから、戸口は少ない。震災の影響は、青木町と同様に、稍大きく、火災も各所に起り、殊に神奈川驛以東の目貫場所である各町は、一齊に焦土となつた。別町の東北部を占めてゐる字柏町富家町、稻荷町新町浦島町等の全部は焼失した。殊に町内には工場が多かつたので、損害は多大であつた。震災後掠奪が各所で行はれた。

一字浦島町並に新浦島町

此の二町は戸數三百三十九戸、人口一千五百五十三人を有してゐた。家屋の倒潰七、半潰五、他は概ね小破程度であつた。新浦島町は埋地だつたので、龜裂多く、到る所濁水を噴出し、尙地盤も低下した爲に、満潮時には海水の上がつた所もあつた。人々は海嘯の噂に恐れて、浦島山へ避難してゐた際、午後二時頃浦島町五百八十二番地の邊より發火した。當時現場には既に一人の住民も居なかつたのであつたが、附近子安町の平戸氏方に使役されてゐた鮮人數名は、それと見るより直に馳せつけ、手にくバケツ、手桶を携へて下水を汲み上げ、必死となつて消防に努めた爲、僅かに十二戸を焼いたのみで、間もなく鎮火した。然るに又もや二時半頃に至り、新浦島町の人造肥料株式會社から硫酸の爆發に因つて發火し、遂に同社を全焼した。罹災の主なる建物は浦島町の名取倉庫、日本カーボン株式會社、新浦島町の人造肥料株式會社、横濱豆粕工場、食鹽再製工場、日清製粉株式會社等であつた。町内での死者は二名。他町よりの避難者は三百五十三名あつた。

二 新 町

當字は戸數約六百五十戸、人口約二千六百人を有してゐた。家屋の倒潰二十八戸、他は概ね大破乃至小破程度であつた。住民は渡邊山浦島山又は能滿寺の境内に避難してゐたが、午後五時頃になつて、隣町の横濱製鋼會社から發した火が延焼して來て、京濱電車線路を隔てた丘の九戸を焼いた。町内での壓死者は二名であつたが、出先にての死者は十五六名もあつた。二日頃より殘存家屋を頼つて來た者が約一千七百名に及んだ。此邊り掠奪盛に行はれ、其難に遭つた家が二十八戸、物品價格が二萬八千餘圓に及んださうである。

三 字神明町及千若町の一部

此の町は戸數約八百、人口約三千五百人を有してゐた。倒潰は全戸數の約四分の一、他は概ね小破程度であつたが、大體に於て千若町の被害が甚だしく、川岸は殆んど悉く崩れ、所々に地割れを生じた。東神奈川驛構内にも地裂を生じた。常盤橋は破損したけれども、通行には差支なかつた。主なる被害建物として、能滿寺・神明社・小學校・慈雲寺

は倒潰し、東光寺は大破した。其の他横濱倉庫神奈川蒸綿所・日本製粉會社浪花倉庫會社等は倒潰乃至半潰大破し、東神奈川驛は少しの破損であつた。地元での死者四人、他町に出でての死者八人を算し、神明町の町民である市會議員石井政太郎氏も、南仲通を通行中不幸に遭つたのである。

四 字神明町通稱仲木戸

當字は戸數二百六十戸、人口一千八十八人を有してゐた。約三分の一強の倒潰で、概して表通が被害甚だしかつた。住民は東神奈川驛前の廣場に避難した。金藏院から發火したけれども、附近の者が駆け付けて消し止めた。九番町方面の火も幸に此地域には來なかつた。被害の主なる建物は眞言宗金藏院の庫裡及鐘樓倒潰、本堂半潰、庭前の大佛轉落、其の他では高津旅館表二階の全潰等である。死者は六名あつた。

五 十番町及千若町の南西部

當町は戸數七十四戸、人口八百八十人を有してゐた。倒潰二十六戸、破壊した家屋六十戸であつた。千若町の電燈株式會社・日清製油株式會社・古田コークス製造所等何れ

も破壊した。火は仲ノ町九番地まで延焼して來たが、町民が極力消防に努めたので、遂に火災を免れた。而し町民はライジングサンの燃えてゐる石油の黒煙に恐れて、十日まで戸外に出てゐた。

六 稻荷町竝立町

當字は戸數約百六十戸、人口四百八十人を有してゐた。震害は此邊では可成甚だし、丘陵地域の立町は左程ではなかつたが、稻荷町は殆んど倒潰した。立町の石垣は全部崩れて道を埋め、所々に大龜裂を生じたので、住民は丘へは避難することが出来ない爲め、多くは鐵道沿線へ避難した。約三十分を経て、富家町の某工場より發した火が、稻荷町へ延焼し來り、之に續く立町をも其の渦中に入れ、山手の二十戸を残したのみで、他は悉く焼失した。死者は地元では幸に一人もなかつたが、負傷者は數十名に達し、尙外出先での遭難が五名あつた。罹災の主なる建物は、稻荷町の東京製鋼株式會社である。

七 浦島丘

當字は戸數百七十三戸、人口約六百人を有してゐた。震災の起るや、内田造船株式會

社の社宅百十一戸と、一般民家約三十戸とが倒潰した。人々は何れも山手の空地や、カーボン會社隣地の空地に避難してゐた處、午後二時頃になつて、稻荷町なる横濱製鋼株式會社から發火した。火は附近の民家を焼いて、忽ちこの町に延焼し來り、八方に飛火して、僅かに二十八戸を残したのみであつた。罹災の大建物としては、内田造船會社合宿所及浦島小學校は何れも焼失した。カーボン會社合宿所は大破したけれども、火災は免かれた。内田造船所の社宅に居住してゐた者は、多く長崎地方から募集に應じて來た職工であつたが、歸郷も出來ず親戚知己とともないので、困窮を極め、漸く町内有志の助力に依り、倒れ木材や焼けトタンなどを拾ひ集めて、六十八戸の假小屋を造り、配給品によつて露命を繋いでゐたが、其の後各方面の焼跡片付に使用された。縣では九月十五日にバラック七棟を建て、職工達を收容した。死者はなかつた。

八 富家町

富家町は戸數約三百戸、人口は約千二百人を有してゐた。この邊は水田を埋めた所であるが、倒潰家屋は十戸しかなかつた。東海管鉛株式會社は倒潰して、二名の壓死者を出した。零時三十分頃、柳町より延焼した火は、約二百五十戸を焼き拂つた。焼死は

なく、壓死者前記と合せて五名を出したただけであつた。住民は鐵道線路鳥越村浦島村等に避難した。

九字 柳町

柳町は東神奈川驛の裏側であつて、この邊での賑ふ土地である。戸数は約四百戸、人口約千六百人を有してゐた。倒潰家屋は約四十戸、半潰約五十戸で、一番多く倒潰した所は、街の中央から東北に至る幅十五間位の所であつた。午後零時二十分頃リンネット會社から發火した火は、擴大な同會社を一呑みにして、北方の民家を焼き拂ひ、風が變ると、共に、東方の鳥越町に移り、更に柳町に戻つて、富家町に延焼し、數百戸を焼きつくした。罹災した主なる建物は、帝國紡績株式會社水野輸出品工場、横濱輪工株式會社、横濱合金株式會社等で、リンネット株式會社では、女工一名壓死した。會社の焼跡は非常に廣く、この町の三分の一を占めてゐる。同町の壓死者は二名、外出中死んだ者は九名であつた。この邊は井戸はなかつたが、丘から清水が出てゐたので、人々はこれを飲んで、喉の渴きを潤ほすことが出来た。震災後この邊の土地は住宅地となつて、戸數が増加した。

一〇 鳥越町

鳥越町は山沿ひにある、狭い町である。戸數約百六十戸、人口六百五十人であつた。家屋の倒潰三戸、半潰一戸、大破の家屋も尠くなかつたが、大抵は續いて居住することが出来た。午後一時頃、柳町のリンネット會社を焼いた火が延焼して來て、忽ちのうちに、九十二戸を焼いたが、死者は一人も出さなかつた。住民は後方の渡邊山に避難した。

一一 白樂

當字は東白樂、西白樂に分かれ、背後に丘陵を負ひ、民家は少ししかない。家屋の倒潰は三戸しかなかつた。死者もなかつた。市内としては此の邊りが最も被害の少なつた部分の一であつた。

一二 齋藤分

齋藤分は二本榎に連なる高臺で、市營住宅百八十六戸と外に俱樂部があつた。半潰約三十戸、大破七十戸、他は概ね小破で、全然破損しない家が約十戸であつた。死者は動

め先に於て二人あつた。他方面よりの避難者約六百人もあつた。

一三一 本 榎

二本榎は大部分丘陵地で、人家は少く、丘沿ひの平地は狭いけれど、商家は相當竝んでゐた。戸數は百九十戸で、人口は約七百六十人であつた。この内倒潰家屋は十戸、半潰は三十戸であつた。地内の石垣の土手が約百間許り崩壊した。死者は外出中の者四名であつた。人々はバラテスト教會や、前の廣場や、二谷の縣立工業學校前に避難した。

一四 中 川

當字は平地で、戸數約百七十戸、人口約七百を有してゐた。家屋の倒潰は三十四戸、半潰は六十戸、その他は大抵少しの破損を見たくらゐであつた。二千三百六十六番地の附近に地割を生じたところは、最近埋立することになつてゐる。

一五 二ツ谷及平尾前の東南部

二ツ谷及平尾前の東南部は、東海道鐵道線路の西北に在つて、此邊りでの賑やかな土

地で、戸數約四百二十戸、人口約二千人を有してゐた。被害は此邊りとしては、比較的多かつた方で、家屋の倒潰約七十戸、大破程度も多く、殊に町の表通りは被害が甚だしかつた。瀧ノ川の護岸も全部崩壊した。主なる建物の中、慶運寺の庫裡は半潰し、浦島觀音堂の鐘樓は倒潰した。死者は地内に於て約三名、外出先に於て三名あつた。住民は二本榎の丘地及東海道線路上に避難した。殘存家屋を頼つて來た他町の避難者は、一時一千人に上ぼつた。火災を免かれたので、復興案外早く、年末までには町並みも略、元通りになつた。

一六 平尾前の西北部

平尾前の西北部は、此地の大部分を占め、地勢平坦で、戸數四百四十戸、人口一千百十六人であつた。家屋の倒潰は十二戸、半潰約百戸、其の他大破も尠からずあつた。縣立工業學校及平尾前俱樂部は半潰し、二ツ谷小學校は大破した。二千七百五十五番地の地先に幅約五寸、長さ約二十間の地割を生じ、工業學校周圍の石垣は崩壊し、柳町に通ずる小橋二箇所墜落した。死者は町内で三名、勤務先で三名あつた。町民は町の後方にある青物市場の原、工業學校々庭、俱樂部等に避難した。他町より殘存家屋を頼つての避

難者が約五百人あつた。

一七 飯田町

飯田町は平地で、戸數百十五戸、人口約五百七十人。家屋の倒潰は二戸、他は概ね小破程度であつた。飛火は屢々來たけれども、町民が協力して防いだ爲に、無事なるを得た。餘震を怖れて婦女や老幼は成佛寺境内に避難した。他町からの避難者約三百人あつた。

一八 西之町

西之町は字幸ヶ谷丘地の眞下に在つて、濱岸に近く、この邊りは賑つた所であつた。戸數八十三戸、人口約四百三十人を有してゐた。震災は輕微で、屋根瓦や壁などが幾分落ち、古い家が一戸倒潰した位のものであつた。火は神奈川驛附近から發火し、更に午後二時頃、宗興寺附近からも發火して、四時頃には町の全部を焼失した。興信、平沼、安田の諸銀行はいづれも焼失した。死者は一名もなく、通行人の焼死者が一人あつたのみであつた。

一九 仲ノ町

仲ノ町は、西之町、九番町、十番町等と同様に、神奈川街道筋の中心地である。戸數百二十戸、人口六百四十人を有してゐた。震災の響影は輕微で、倒潰家屋六戸、倉庫三棟であつたが、火災は免かれなかつた。火災は神奈川驛前に起つた。同町は丁度風下に當るので、町民は早くも家財を纏めて、十番町の熊野神社の境内や、金藏院の境内や、京濱電車の軌道に避難した。果して四時頃になつて、西之町から火は延焼して來て、海に面する側を焼き拂つたが、山に向つてゐる方の側は、西之町の境目で、神奈川消防部員、警察署員、其の他住民が總掛りで消防に努め、漸く消し止めた。海側の火はこの町で五十一戸を焼き、九番町に延焼した。當町には死者は一名もなかつた。幸ひに神奈川署の近くなので、救護も警備もよく行き渡つて、飲料水や食糧は早く行き届いた。火を免れた人達は、罹災した人々を助けて、町の復興の爲めに努力し合つた。年末頃には略々建築も出來て、歳暮の大賣出しまでやつて景氣を添へた。

二〇 字 御 殿 町

町内には多少道路に龜裂あつたぐらゐで、倒潰家屋は僅に十戸であつた。後から火を受けたが町民が防火に努めた爲め、延焼しなかつた。死者は一人もなかつた。

二一 字 九 番 町 星 野 町 字 渡 邊 町 橋 本 町

九番町は仲之町の東北に續いて、神奈川街道筋に在る町で、字御殿は其西北に續き、渡邊町及橋本町二丁目三丁目は、東南の海邊にある離れ地で、工場地である。この町の戸數は四百三十二戸、人口千八百九人であつた。倒潰した家屋は三十戸で、その他工場商店住宅等は僅な損失であつた。住民の大部分は、金藏院と熊野神社とに避難したが、仲之町を焼き拂つた火先は、夕刻になつて、遂に九番町に延焼し、神奈川演藝館に至るまでの間に、七十八戸を焼失したが、消防署始め、住民の努力に依り、漸く夜更けになつて鎮火した。火脚が遅かつたので、家財を出した者も多かつた。死者は僅に四名であつた。星野町の岩井製油株式会社梅原鐵工場、三井貯炭所、石川屋筏部渡邊造船所、橋本町の淺野船渠など大破損を被つたが、火災は免れた。

二二 字 小 傳 馬 町

同町は仲之町の東に續く小さな所で、戸數五十五戸、人口約四百五十人を有し、その多くは漁民である。家屋の全潰はなく、半潰に近いものが三十戸あつた。住民は地震ばかりを恐れて、遠い火事には氣をかけなかつたが、瀧ノ橋邊に火が來たと聞いて、家財を持ち出し、海岸の舊臺場や、内堀の埋立や、附近に繋留してあつた漁船などに避難した。午後五時頃になつて、西町獵師町を焼き拂ひ、その火が遂に延焼して來て、全町は忽ちに烏有に歸した。

二三 字 獵 師 町 字 棉 花 町 字 舊 砲 臺

獵師町棉花町舊砲臺は相續いて、海邊にある。獵師町には二百九十戸、棉花町には百十戸、人口は兩町合せて一千五百六十を有してゐた。地震の被害は、極めて輕微で、何れの家屋も、瓦や壁が落ちた位なものであつた。住民は餘震を恐れて、戶外に飛び出し、舊砲臺内堀の埋立地や、高島驛構内などへ避難したが、間もなく瀧下町及西之町方面から來た火の手は、折柄の強風に煽られて、同町を焼き盡した。火の子は町民達の避難して

字九番町 星野町 字渡邊町 橋本町 字小傳馬町 字獵師町 字棉花町 字舊砲臺

ある砲臺内に盛んに落ちて、危険は眼の前に迫つて來た。女子供は悲鳴を擧げて逃げ廻つてゐたが、海岸に繋いであつた五大力船に避難して、一同無事なるを得た。死者は一人もなく、他町で死んだ者が二名あつた。當日から各地の避難民が續々入つて來た。その數は約三千人に上つた。同町に漁家が四十戸もあつたので、翌日より漁に出て、魚を町民に馳走して喜ばせた。

二四 橋本町一丁目及山内町三・四丁目

橋本町一丁目と山内町三・四丁目とは横濱船渠會社の倉庫所在地で、橋本町には九棟、山内町には十一棟あるばかりで、民家はない。この邊は海邊であるから、地盤も固く、倉庫も破損せず、避難民の安全地となつた。

第三項 子安町

子安町は神奈川町の東にあつて、東南は港内に面し、他の三方は郡部に接して、中部と海邊は大抵平坦地である。その邊には工場や人戸があつたが、その他は丘ばかりで、人家はない。平坦地は所々火災を起した。

西子安町の字海道通 七島の一部 守屋町

西子安町と守屋町とは平坦地で、守屋町の大部分は埋立地である。子安町の一部は丘地をなしてゐる。戸數は合せて千三百戸、人口約五千二百人を有した。平坦地は被害は稍多く、家屋の倒潰約五十戸、その他半潰が大分あつた。倒潰した主な建物は、子安町の相應寺大安寺薬王寺で、守屋町では東洋化學工業株式會社共榮造船所、その他各大會社工場が倒潰した。守屋町には所々に地割を生じ、富士見橋は墜落し、川岸は殆んど崩壊した。間もなく火は浦島町より發火したが、人々が寄り合つて消し止めたので、此の方面も火災は免れた。死者は町内で三名を出し、外出中の者で死んだ者二名あつた。當時住民達は、京濱電車の線路や、浦島の丘などに、遁れてゐたが、その後町に歸つて來て、半潰の家には柱を立てたりして住ひ、自分の家が全潰した者達は假小屋を造つて住んだ。他町からの避難民は、一時は三百餘名あつた。當時は鮮人騒ぎと掠奪が激しかつた。

東子安と西子安を含む各字竝に守屋町

東子安町の中には、神之木、打越、溝下等、西子安町には大口、七島等の各字がある。守屋

町三四丁目は、市の最も東に在り、鶴見町に隣した町で全町埋立地であるが、他の地域は丘陵起伏せる地である。戸数は七百で、人口は約二千八百を有してゐた。當日は恰も溝下の郷社一宮神社のお祭りであつたので、今年こそは花々しいお祭をやらうと、各宇では山車や神輿の行列を揃へて、笛音賑はしく踊り狂つてゐた折柄であつた。思はぬ大震が突如とし襲來したときには、今までの喜びどころか恐ろしさに一時は喪心してしまつた。家屋は見る／＼中に約二百戸倒潰し、百五十戸は半潰して、道路は道なきほど埋められた。町民達は狼狽してゐる中に、火は午後二時頃、新子安と宇溝下の二箇所から發火し、東北に向つて延焼して、約百棟を焼いて午後三時頃、風が變ると、又逆戻りをして、自然に鎮火した。罹災建物の主なるものゝ中、焼失したのは守屋町の人造肥料會社、日本人造絹絲株式會社等で、倒潰したのは日本製銅株式會社、横濱化學工業會社、河西工業所、入江町のアセチリン株式會社、七島の半田製油株式會社等で、尙社寺學校等も大破した。其中に本慶寺一宮神社、淺野綜合中學校等がある。町民等は海嘯を恐れ丘に避難してゐたが、懸て元の焼跡に歸つて、假小屋を立て、復興に努めた。

横濱市震災誌第二册終

大正十五年八月五日印刷 大正十五年八月十日發行	
著作兼 發行人 横濱市役所市史編纂係	印刷人 大橋 徳 壽 <small>横濱市根岸町竹ノ丸三、二八八番地 電話本局〇七九三番</small>
印刷所 大橋 活版印刷所 <small>横濱市相生町三丁目五十一番地 電話本局(三三)七二四八番</small>	非賣品







